

多動と診断されたH児の指導

下 田 研 嗣

1 H児への取り組みについて

H児は、現在、小学部三年生である。医師の診断によると、多動症候群、自閉的傾向をもつ子である。診断が示すように、衝動的で、ちょっとのすきを見ては、奇声をあげ無意味に走り回ったり、突然、興味を示した物を取りに行ったりする。行動に脈絡がなく、一つの行動から瞬間的に他の行動に移るといったふうに、自分の置かれた状態の中で、自分自身をコントロールする力が弱い。そこで、衝動的な行動を少しでも軽くして生活させることができれば、自分の考えに基づく遊びや学習が続けられ、人とのかかわりももて、毎日が、少しでも楽しく過せるのではないかと考え、このテーマと取り組んだ。

2 指導の方針

このような子供達に対して、我々は、まず、刺激を制限することを考える。一般に、人は、自分をとりまくさまざまな刺激の中から、自分にとって必要な刺激を選んで対応し、その他の刺激には、とりあわないということが無意識のうちに行っている。ところが、H児の場合、このような力が未熟であり、放っておけば、あらゆる刺激に、無差別に反応してしまう。そこで、できるだけ興奮させないような配慮を心がけることを基本に、

ア 教師とのラポートを深め、親しい人間関係をつけることにより、精神的、情緒的に安定させる。

イ 学校生活のリズムを身につけさせ、規則正しい生活をさせることにより、目的を持った生活経験をさせ、衝動的な行動を抑制させていく。

ウ 興味のある事象を手がかりとし、落ち着いた環境で取り組ませることにより、情緒の安定をはかる。

エ 興味、関心のあることを通し、会話の機会と時間をできるだけ多くとることにより、問いかけに正しい反応ができるようにする。

という、4つの指導方針を立て、それをもとに、実践にとりかかった。

3 指導の実際

(1) 朝の活動

一見、自分勝手に見える行動も、実は、朝、学校へ来ても何をしたらよいのかわからず、空白の時間を動きまわり、叫びまわって、時間をうめているように思える。衣服の着脱、整頓、生活ノート¹の提出など、技術面では何ら障害はないが、朝の行動を見ていると、今まで、これらの活動が切り離され、技術面のみの指導に重点がおかれていた感があった。この、朝の活動を、一連のパター

ンとして習慣化することは、これらの空白時間を少なくすることであり、H児も、これらの指示を無意識のうちに求めているように思われた。そこで、まず第一に、（登校→あいさつ→着がえ→生活ノートの提出）という、生活の流れのパターン作りにとりかかった。やがて、習慣化されれば、学校生活のリズムも身につく、規則正しい生活を送ることができると考えたからである。以下はその経過である。

58年度前期 教室に入るなり、かばんを放り投げ、とび出た。指示されて、一人で着がえを始めた。

後期 「おはようは？」と言われ、ようやくあいさつができた。指示が必要だが、一人でさっさと着がえができるようになった。生活ノートは、何度も指示されないとなかなか出せない。

本年度5月 教室へ入るなり自分から「おはようございます」と言えるようになった。着がえにはまだ指示が必要であるが、かなり早く取りかかれ、ノートも指示でスムーズに出せるようになった。

9月 あいさつは、自分からすることが定着したようだ。「次は何をしたらいいかな？」の声で、着がえができるようになった。着がえの途中、とび出すこともほとんどなくなった。

11月 あいさつをすませると、自分からさっさと着がえができるようになった。ノートは指示がないと、忘れていることが多い。他の教師へのあいさつもできるようになった。

(2) 午後の活動（給食→歯みがき→洗面→服薬→掃除）

朝の活動と同じように給食後の歯みがき、洗面、服薬、掃除を一連の活動としてとらえさせることは、H児にとって先を見通した行動につながると考えた。さらに、集団意識のほとんど育っていないH児にとって、教師やクラスの友達と一緒に働く掃除はとても有意義な活動のように思えた。そこで掃除についてもその順序を、

1. 自分達のいすを机の上にあげる。
2. 給食時に使ういすを、教室のすみに運ぶ。
3. 教師がはき集めたごみを、ほうきとチリトリで取り、ごみ箱へ入れる。
4. 雑巾がけをする。
5. 雑巾の後しまつをし、手を洗う。
6. みんなで集まり、「おそうじ、ごくろうさまでした」のあいさつをする。

として毎日繰り返した。



- 4月 給食が済むやいなや外へとび出し、砂場で遊ぼうとした。掃除を始めても雑巾をすぐに放り出し、いなくなることが多かった。
- 7月 時々いなくなることもあるが、指示されれば、いすを運んだり、雑巾がけをしたりできるようになった。歯みがきの後、口のまわりに歯みがき粉がついていることが多かった。
- 10月 食後の歯みがき、洗面は、指示がなくてもできるようになった。薬を飲ませるのを忘れていると、自分から「くすりだで」と言ってこれる。掃除は、指示されればさっさと取りかかれる。
- 11月 自分から「そうじしようで」と言うことが多くなった。指示がなくても、机の上にいすをあげたり、ほうきやチリトリを持ってきたりできる。大分掃除のパターンが身についてきた。歯みがき、洗面についても、給食が終るや、さっと取りかかれるようになってきた。しかし、まだまだ定着とは言えず、できることが多くなったという程度である。衝動的な行動は、教師の注意が他の児童に注がれている時に多く見られることに気づき、常に、目をかけているように心がけて接した。

(3) 自由学習の時間

H児の問題の一つに、集団の中で自分の力を出せないという点があげられる。そこで、一日に二回（一つは、着がえをすませてから朝の会までの時間、一つは、掃除をすませてから午後の学習までの時間）、自由学習時間を設定した。前者は、落ち着いた環境の中で興味・関心のあることに取り組ませることで、集中力、持続力を育てることに重点をおいた指導を行い、後者は、本児の独創的な活動や遊びを大切にした指導を心がけた。4月当初、前者の活動よりも体育館や校庭を走り回る後者の活動が多かった。しかし、その中からサクサク（地面や床に平行な線を引き、それを目で追って遊ぶことをH児はこのように呼んでいる）のようなかなり集中できる遊びが生じた。7月頃になり、少しずつ、H児にも落ち着きが見られ出し、迷路遊びなどのゲームを楽しむことが、短時間ではあるが可能になった。10月頃になると、これらの自由学習時間のパターンも定着し、それと同時に本児の興味も絵本や数など、以前とは全くちがったものへも向けられるようになった。また、今まで言葉だけ知っていて物と結びついていない物の名前など、自分からたずね、確認する姿も見られつつある。

(4) 生活単元学習（いもほりにおける取り組み）

本単元は、いもほりという、H児も含め子供達にとって興味深い学習（遊び）経験である。

（準備→いもほり→洗う→焼く→食べる→片づける）をくり返す中で、目的のある生活経験（これをしたら食べられる）をさせながら、もう少しがまんという心を育てようと考えた。最初、目的の理解できていないH児は、ただ畑を走り回ったり、バケツに掘ったいもを投げ入れ、その音を楽しんだり、飛び散る水に興奮したりしていた。それも、二度三度くり返すうちに、まず食べるとい



う大きな目的ができた。目的ができると、いもに興味を示すようになり、畑の中でそれを見つけると、とても喜び、次から次へと掘り出すというような意欲的な活動も見られるようになった。その上、一連の学習パターンがわかり、先を見通した行動がとれるようになってきた。いもを掘ったら集めるとか……。

(5) 家庭との連携

H児に限った事ではないが、学校と家庭との一貫した指導は大切である。そのため、できるだけくわしくその日の本児のようすを家庭に伝えるとともに、母親に叱ることを少なくし、学校と一貫した指導を心がけるように伝えた。最初は、ほとんど空白だったノートにも、少しずつ意見やH児の家庭でのようすなど、かなりくわしく書かれるようになり、この試みに協力してくれるようになった。

※生活ノートより（昭和59年10月30日）

家庭 → 学校	学校 → 家庭
<p>学校から帰るや、今日コーヒー飲んだで、ケーキ食べたで、と話してくれました。汽車のパズルを大事そうに持ちまわっているの、どうしたかと聞くと、〇〇〇のたん生会があったと教えてくれました。近頃、学校であったことや先生にしかられたことなど、家に帰るとよく話してくれます。今朝、少し落ちつきがありませんがよろしくお願ひします。</p>	<p>今日は、〇〇ちゃんの家畑へいもほりに行きました。畑では走りまわることもなく、いもほりに熱中していました。いもが出てくる毎に「あったあった」と喜んで、次々と掘り出していました。この頃、絵カードを持ってきては、これはとんぼか、これはうさぎか、などとたずねて来るようになりました。自分なりに一つ一つ確認しているのだと思います。家でも聞きにくると思いますが、おっくうがらずに教えてあげて下さい。</p>

4 ま と め

指導の基本的な考え方として、レポートを作り、できるだけ興奮させないで、状況の変化をなるべく少なくした指導のパターンをくり返す中で、無意味な（に見える）行動から、自立に大切な行動（に見える）をする時間が多くなってきた。パターン化された行動ではあるが、その中から、先を見通した行動が生まれたり、教師に物の名前をたずねたり、催促したりなどができるようになってきた。前年度や4月当初に比べると、格段の落ち着きが育っているように見えるし、自己を抑制しようとする力もついてきたようにも思える。だからと言って、「豊かな心、たくましい行動」が十分に育ったなどとは言えないが、しかし、これらわずかの芽が見えて、H児もそのような可能性を十分に持っているのだということがよくわかり、指導に自信がわいてきたような気がする。



振りをつけて踊った（左から2番目）

参考文献 「実践障害児教育」 6月号 P34～37